

2019 年度ラインホルド・ニーバー研究会及び組織神学研究会・伝道研究会共催
第2回ラインホルド・ニーバー研究会
『ラインホルド・ニーバーの近代思想批判の特質——チャールズ・テイラーとの比較において』
発題者：千葉 眞



会場の様子

2020年2月28日（金）、聖学院本部新館2階集會室を会場に、「2019年度第2回ラインホルド・ニーバー研究会及び組織神学研究会」が開催された（今回は、ラインホルド・ニーバー研究会と組織神学研究会と合同開催、伝道研究会と共催）。今回の発題は、千葉眞氏（国際基督教大学名誉教授、聖学院大学大学院特任教授）による『ラインホルド・ニーバーの近代思想批判の特質——チャールズ・テイラーとの比較において』であった。

千葉氏の発題は、カナダの政治哲学者C・テイラー（1931～現在）とR・ニーバー（1892～1971）の近代思想批判を比較しつつ、両者の現代的意義を明示しようとする大変興味深い内容であった。

千葉氏によれば、二人の共通点は、西洋近代における光と影の両面を認めている点にあるが、後者のアイデンティフィケーションの理解が異なっており、それ故に影の面を克服する方途も異なっている。テイラーにおける近代化論の三つの特質として、①理神論、近代啓蒙主義、近代ロマン主義、②「日常生活の肯定」テーゼ、③「本来性の倫理」テーゼ、が挙げられる。①においては、特にロマン主義を高く評価し、最終的に20世紀へと続くロマン主義の興隆に希望を見出している。②は、宗教改革者らによるBeruf理解、ウェーバーが明らか

にした世俗内禁欲をテイラー流に定義した表現であり、キリスト教的理念がキリスト教以外の思想的諸系譜によってほぼ純然たる形で保持・継承され、近代世界に着床したことを説明する概念規制である。③は、J・ルソーらのロマン主義に由来しており、本来の自己の内なる声に従うことによって最高の道德の状態が確保されるという、今日のポスト・デュルケーム型の靈性に接続するテーゼである。

一方、ニーバーにとって近代化論は、テイラーと異なり、根本的にルネサンスと宗教改革の人間觀の相剋に由来するものと理解する。近代とは、前者の後者に対する、ほぼ完璧な勝利によって齎されたものであり、近代に表出する様々な危機は、他の外敵ではなくてその「勝利自体の内的混乱」によるものである。ニーバーは合理主義、自然主義を批判し、テイラーが評価するロマン主義も、合理主義の欠陥を克服する重要な役割を果たしたとするものの、なお懐疑的である。

千葉氏は、テイラーとニーバーの思想を比較することは、相違点が多いながらも、有意義な作業であろう、と述べられた。そして、テイラーにおいては、特に「本来性の倫理」に1960年代以降の歴史的事象を理解する重要な鍵がある、とし、ニーバーにおいては、そのキリスト教的人間論の特質——自己超越性、有限性、罪性——を理解することが現代においてより重要な作業である、と述べられた。

発題の後、活発な質疑応答が行われたことも付記しておく。出席者12名。

（報告者：五十嵐成見 [いからし・なるみ] 聖学院大学心理福祉学部兼人間福祉学部チャブレン・准教授）